

海軍艦政局創設に関する一考察―初代局長伊藤雋吉を中心として―

中
尾
光
一

海軍艦政局創設に関する一考察 — 初代局長伊藤雋吉を中心として —

中 尾 光 一

はじめに

海軍艦政局とは、明治一九（一八八六）年に設立された海軍省内の機関の一つで、主に海軍艦船や兵器の計画・製造を任務とした技術的な部署である。第二局・艦政本部・艦政局・艦政本部と名称が変遷し、後に省内から外局に変更されるが、終戦まで造船・造兵・造機に関する事務を司った。造船では戦艦「大和」の設計者として知られる平賀譲が主に所属していた部署でもあり、造機では艦本（艦政本部の略）式ボイラーに代表される機関の開発などを行い、造兵でも様々な砲や兵器を計画していた。⁽²⁾ また、筆者が関心を寄せている艦砲射撃用の計算機「射撃盤」の開発計画を立ち上げた部署でもある。⁽³⁾

海軍技術部門に関係する研究史としては、室山義正氏の『近代日本の軍事と財政』⁽⁴⁾、篠原宏氏の『海軍創設史』⁽⁵⁾、幕末

からの技術史として神谷大介氏の『幕末期軍事技術の基盤形成』⁽⁶⁾、金澤裕之氏の『幕府海軍の興亡』⁽⁷⁾などがある。また、奈倉文二氏・横井勝彦氏の『日英兵器産業史』⁽⁸⁾や同じく奈倉氏の『日本軍事関連産業史』⁽⁹⁾といった武器移転から見た論考、技術移転などを主題として研究されている池田憲隆氏の論考⁽¹⁰⁾などが挙げられる。また、機関など個別の技術史においては研究が進んできているが、部門としての艦政局・艦政本部に関する論考は少ないように思われる。

本稿では、これらの先行研究より、艦政局という組織とそこに所属した人物に焦点を当て、主に創設期の艦政局の職掌と人物について述べていきたいと思う。『日本海軍史』（海軍歴史保存会 一九九五）の役職在位一覧表によると、艦政局の初代局長は伊藤雋吉であり、その期間は約四年にわたる。終戦までに三〇人が長に就任しているが平均すると約二年と

いう在任期間になっており、伊藤の約四年は異例のことといえる（最長は大正八―一二年の岡田啓介）。また、伊藤はその後海軍次官を約八年務める海軍でも中枢にいる人物であり、その功績で男爵に叙されている。さらに、出身地で見ても、伊藤は丹後田辺藩（舞鶴）という小藩の出身であり、これも異例のことといえる。しかし人物史的な論考はまだまだ少ない。これらを踏まえ、本稿では主に伊藤雋吉が艦政局長に就任するまでの経歴を明らかにし、その人物の再考を試みるとともに、艦政局の職掌との関係を見ていきたい。

一 海軍艦政局の設置

海軍艦政局とは、明治一九年の海軍省官制改革にて設置された海軍省の局である。明治の海軍省組織を概観すると、まず明治五年に発足した海軍省は、兵部省の組織と任務を引き継ぐ形で、秘史局・軍務局・造船局・水路局・会計局の五局があった。その後、各局は名称変更や廃止、新設を繰り返していくが、明治八年に造兵司と武庫司が合わさった兵器局が加わり、明治一六年に水雷練習所が水雷局となって加わり、一七年に調度局がこれに加わった。また、軍令部の前身ともいえる軍事部も一七年に創設され、官制改革前は七局（総務・

会計・主船・水路・兵器・水雷・調度）一部（軍事）という制度になっていた。⁽¹²⁾

明治一九（一八八六）年一月二九日の海軍省の官制改革において軍務局・艦政局・会計局の三局と大臣官房と軍事部という編成となり、海軍省外に水路部・購買委員・海軍衛生部・兵器製造所・火薬製造所などが置かれることになる。艦政局はそれまでの主船局、兵器局を合わせる形で設置されることとなり、海軍年報「海軍省第十二年報」によると、「本局ハ従前ノ主船局掌理事務及兵器局水雷局調度局機関本部等ノ兵器彈藥艦船営需要品汽機汽缶ノ造修購買保存及ビ軍事部掌理事項中徵発物件商船調査等ニ関スル事務ヲ繼承シ一二之ヲ調理セシム」とある。⁽¹³⁾ 部局が増えて複雑化しつつあった海軍省内在が整理されたわけである。

また、官制改革前は主船局が管轄していた小野浜造船所も、一九年七月一日に制定された「小野浜造船所官制」において、「呉鎮守府開庁マデ海軍省艦政局ノ管理ニ属シ」と定められて管理下に置かれた。⁽¹⁴⁾ この小野浜造船所とは、イギリス人のE・C・キルビーらによって明治一一（一八七八）年に神戸に設立された民間の造船所で、日本で最初の鉄製汽船を建造したところでもあった。そこに海軍は鉄骨木皮軍艦「大和」

(初代)を明治一六年二月二三日に発注したのであるが、大きな火災などで財産を失い経営不振に陥ったキルビーは一六年一二月九日に横浜で自殺してしまう。発注した「大和」完成の遅れの心配や、国内造船技術の確立を目指していた海軍は造船技師の散失を危惧し、明治一七年一月一七日に小野浜造船所を買収し、主船局の管轄としていたものである^⑤。

艦政局内には兵器課、造船課、機関課、機装課、需品課、運輸課、建築課の七課が置かれることとなり、海軍小野浜造船所も管轄することとなった。制定された海軍省条例の第二十五条を見ると「艦政局ハ艦船砲銃水雷其他海軍ノ材料ニ関スル一切ノ事項ヲ管理スル所トシ其管掌事項ヲ定ムル^⑥」とあり、各課の管掌が制定されている。その各課の管掌を要約すると、

兵器課 砲銃水雷彈藥其他兵器の製造や軍艦兵装に関する計画及び図案や入費計画書などを取り調べる
こと、砲銃水雷彈藥其他兵器の配備や経費予算に関すること、兵器の製造購買に関する事務・兵器の現状調査や試験に関する事務、兵器製造所や火薬製造所の工場に関する事務取扱など
造船課 艦体及其属具製造改造の計画及び図案入費概算

書などの取り調べ、艦体などの造修費予算の取り調べ、艦船の検査及び存廃に関する事務取扱など、

機関課 機関及び其属具製造改造計画に関する図案や入費概算書等の取り調べ、機関などの造修費予算の取り調べ、機関の現状調査や保存

機装課 艦船機装の計画に関する事務、付属具軍需品・端舟属具の定数や増減に関する事務や経費予算の取り調べ

需品課 機関長掌砲長掌帆長水工長の主管に属する艦船付属具及び需要品の製造購買並びに運搬供給に関する事務取扱、各官庁の需要品や各倉庫に関する事務取扱

運輸課 戦時運輸の計画に関する事、兵員馬匹及び軍需品の運輸に供すべき船舶調査、海員や水火夫の員数調査、船舶表の編纂

建築課 船渠、船台、兵営、官庁其他水陸の工事に關する計画と事務の取扱、港内の浚渫や水利に関する計画、海軍所属の土地家屋の管理、灯台や浮標や電信等に関すること、建物の保護営繕や暖

炬灯器に関する事

となっており、兵器から建物まで様々な事務を掌握していたことがわかる。

また、艦政局の職員の人数、階級に関しても同時に定められ、それによると、

局長・将官一名、次長・大中佐一名、局長伝令使一名、
属員九名

兵器課 課長・大中佐一名、課僚三名、属員六名

造船課 課長・匠司一名、課僚四名、属員七名

機関課 課長・機関監或匠司一名、課僚四名、属員八名

機装課 課長・少佐一名、課僚・大中尉一名大中機関士
一名、属員八名

需品課 課長・少佐一名、課僚・大中尉一名大中機関士
一名、属員四名

運輸課 課長・少佐一名、課僚一名、属員三名

建築課 課長・匠司一名、課僚二名、属員二〇名

であった。⁽¹⁷⁾ 艦政局の長には将官一名が任命されることが制定されたが、明治一九（一八八六）年の海軍省内の将官は中将七名に少将八名であった【表一】。これら一五名の将官のうち、薩摩出身が八名、佐賀出身が三名、長州出身が一名、

表 1 1886（明治19）年 6 月 海軍将官及び主要役職一覧

階級	氏 名	出身	役 職	生年	没年
中 将	榎 本 武 揚	幕臣	通信大臣	1836	1908
	川 村 純 義	薩摩	議定官	1836	1904
	中牟田 倉之助	佐賀	横須賀鎮守府司令長官	1837	1916
	伊 東 祐 麿	薩摩	元老院議官	1834	1906
	真 木 長 義	佐賀	将官会議幹事	1836	1917
	仁 礼 景 範	薩摩	参謀本部次長	1831	1900
	樺 山 資 紀	薩摩	海軍次官	1837	1922
少 将	赤 松 則 良	幕臣	造船会議議長	1841	1920
	柳 橋 悦 蔵	津藩	水路部長	1832	1891
	松 村 淳 蔵	薩摩	兵学校校長	1842	1919
	伊 藤 雋 吉	丹後田辺藩	艦政局長	1840	1921
	相 浦 紀 道	佐賀	兵器会議議長	1841	1911
	有 地 品之允	長州	横須賀軍港司令長官	1843	1919
	伊 東 祐 亨	薩摩	常備小艦隊司令	1843	1914
	井 上 良 馨	薩摩	軍務局長	1845	1929
陸軍中将	西 郷 従 道	薩摩	海軍大臣	1843	1902
主計大鑑	林(安保) 清康	尾道	会計局長	1843	1909

※『職員録 明治十九年十一月・海軍武官准士官以上名簿』より作成

旧幕臣が二名、その他が二名となっている。薩長土肥や幕臣以外の二人の将官のうち、津藩の柳橋悦は、測量に長けて日本初の海洋測量を行った人物であり、海軍に出仕後は水路局の局長を長く務めた人物である。そしてもう一人が、初代の

艦政局長となる伊藤雋吉である。これから、主に人物史的に伊藤の経歴を見ていきたい。

二 海軍出仕前の伊藤雋吉の経歴

伊藤雋吉【図一】は、天保二一（一八四〇）年三月二八日、丹後田辺藩手代町宮津口で、藩士伊藤勝介の長男として生まれる。幼名を徳太と称し、その後一介となり、明治維新後は雋吉と称した。⁽¹⁸⁾ 伯父に牛田物右衛門という数学者がお

大佐時代



『明治十二年明治天皇御下命「人物写真帖」』より

男爵の頃



『華族画報』より
図1 伊藤雋吉写真

り、牛田は普請奉行の下役として土木建築をする傍ら、伊藤や若い藩士に数学を教えていたと伝えられている。⁽¹⁹⁾ 牛田に関してはあまり

詳しい史料は見つけれなかったが、伊能忠敬が全国測量で田辺藩を測量した際、藩の下役人として随行した一人でもあり、普請奉

行下役として、由良川下流の工事に関係した人物でもある。⁽²¹⁾ 伊藤ら手代町の若者は、この牛田に師事して数学を中心として様々な学問を学んだといわれている。牛田の教えを受けた若者は雋吉以外に、松本賢吾・長沼小一郎・坂根清蔵・片山淳吉・布川益助らがいたという。⁽²²⁾

この同門の中で後にも名が出るのは片山淳吉であり、雋吉の人物像や交友関係を考察する上でもその略歴を述べておきたい。片山淳吉は、雋吉より三歳年上の天保八（一八三七）年の生まれで、藩命を受けて元治元（一八六四）年に江戸へ出て洋学を学ぶ。初めは薩摩の坪井芳洲の塾に入りその後福沢諭吉の慶應義塾で英語を学んだとされている。⁽²³⁾ ここで得た知識を元に淳吉は明治五（一八七三）年に文部省編輯寮に十等出仕として入り、教科書の編集業務に携わっていく。⁽²⁴⁾ そして、明治七（一八七五）年に日本最初の物理学教科書『物理階梯』を翻訳・編集した。⁽²⁵⁾ 『物理階梯』は明治期前半の科学教育に大きな影響を与え、全国の学校に普及していった。⁽²⁶⁾ 片山はその後も物理や自然科学の教科書を編集し、明治二〇（一八八七）年に没している。

また、牛田門下ではないが同じ藩の人物としては、百田重明がいる。百田は嘉永三（一八五〇）年の生まれで、慶応二

(一八六六)年に慶應義塾に入り英学を修めた。⁽²⁷⁾その後大蔵省に入り、明治二二(一八七九)年に『統計学大意』を著している。⁽²⁸⁾明治一四(一八八一)年には、身体を壊した片山淳吉の述べることを聞き取る形で教科書『小学物理講義』全三冊の出版に協力し、その後は開拓使属となり、北海道の開発に従事したと伝えられている。⁽²⁹⁾

牛田の元で数学を学び、片山らと成長していった雋吉は、『加佐郡誌』によると田辺藩の牧野氏に仕え筆札に関する仕事に就いたとされ、その後「藩命を承けて外に出で蘭学及び兵学を修められた」と記されている。⁽³¹⁾どこで学んだかについて『加佐郡誌』には記述がないが、墨堤隠士「陸海将校の書生時代」によると「侍医林洞海の門に入りたいと頼み込んだ、林も至って快活な人物で、蘭学に通じて居たが、右の話聞いて直ぐに承知してくれた。中将は茲にて暫らくの間蘭書を修め、傍ら暇を貰って砲術を稽古いたした、此時の師匠は江川太郎左衛門といつて、有名な砲術家で」とある。⁽³²⁾また、京都府立舞鶴中学校『先賢追慕会講話集』創立一五周年記念『(昭和二二年編)』に、地元舞鶴の先賢たる雋吉の事項に関する講話の記録が残されている。これには「牧野藩に仕へてからは他国に遊学を命ぜられ先づ静岡藩の江川太郎左衛門につ

いて砲術及び砲の製造術を習ひました。(時に年一五歳)」とある。⁽³³⁾林洞海に師事した部分がないが、この二つから安政元(一八五四)年には江川太郎左衛門の下で学んだということとは確かではないかと考える。江川太郎左衛門とは、反射炉を作成したことで知られる葦山の代官江川氏のことと、大砲の製造や品川台場を作成したことで知られている。⁽³⁴⁾

父親の死により一度、藩へ戻った雋吉は、再び江戸へ出て、内田五観のもとで数学を、大村益次郎の鳩居堂にて兵学を学んだ。内田五観は文化二(一八〇五)年生まれの和算家・暦算家で瑪得瑪弟加^{まてまぢか}(Mathematica・算術)塾にて算術を教えていた。明治に入ると天文局特務となり太陽暦への改暦事業に当たった人物である。⁽³⁵⁾また、大村益次郎のもとで雋吉は兵学を学ぶが、その後、幕府から海防を命じられて台場を作ることになった田辺藩に呼び戻されて、安政六(一八五九)年頃より台場構築の任に就くこととなった。⁽³⁶⁾『加佐郡誌』によると、大型三門・小型八門の砲を据えた台場が作られたとあり、製造は国松氏という丹後の鍛冶職人が担当し、⁽³⁷⁾雋吉や叔父の牛田物右衛門が協力してこれを作成したとある。この大砲は「大小一門宛舞鶴明倫校の校庭に残存して居る、大型は長さ一丈五寸、太さは元で六尺、小型は長さ八尺四寸、

太さは元で五尺三寸五分」だったという⁽³⁸⁾。その舞鶴明倫小学校の『明倫百年誌』には、「古砲二門」という回想記事があり、⁽³⁹⁾「先生と「古砲と古鐘」（明治の末ころ）」という写真が掲載されている【図二】。これによると、旧台場跡（大森海岸）にあった砲二門を譲り受けたいとの小学校側からの希望が認可され、明治三二年から昭和一〇年まで校内に置かれていたが、昭和一〇年に工事のために砲と鐘は校庭の南東隅に移され、第二次大戦の間に失われたという。この台場構築については『大村益次郎先生事蹟』で「五、六年懸かった」と雫吉が述べていることから、元治元（一八六四）年か慶応元（一八六五）年あたりの完成であらうか。

台場構築の任に当たった後の雫吉



図2 雫吉が関わった台場の古砲 『明倫百年史』より

の動向は詳しくは残されていない。丹後田辺藩は、戊辰戦争においては新政府側に恭順しているため、大きな動乱にはなっていない。維新後、雫吉は明治二（一八六九）年に海軍操練所の出仕を命じられ、翌三年には中助教となる。⁽⁴⁰⁾雫吉が出仕を命じられ東京に出る際、『加佐郡誌』の百田重明のところに「明治二年伊藤雫吉氏他二三氏に従って東京に出で、其の初志たる英学を修行した当時伊藤氏の扶掖を受けるところが多かった」とあり、⁽⁴¹⁾雫吉が上京する際に百田重明や他の人員が一緒だったことや、東京での生活では雫吉が同郷の者を助けていたことが見て取れる。百田以外の二、三人が誰かまでは書かれていないが、『海軍兵学校沿革』の明治四年の兵学寮職員一覧には舞鶴出身の職員として、十等出仕に片山淳吉、一二等出仕に神戸友干（慶司）、一三等出仕に百田重明の名があり、片山や百田の職が定まるまでの間、雫吉の何らかの力添えがあったのではないかと推測される。⁽⁴²⁾このように、海軍出仕までの雫吉は、伯父や周囲の学友の影響もあるのか、算術をはじめ学問に秀でた若者と伝えられるが、武術に優れていたという記述は見られない。

三 海軍出仕から艦政局長までの伊藤雋吉

舞鶴の知人と繋がりを保ちつつ東京で暮らし始めることになる雋吉は、明治二（一八六九）年兵部省に出仕し、翌三年には津藩士の柳植悦とともに軍艦「第一丁卯」（全長三六メートル・排水量一二五トン）の測量主任となり、国内最初の水路測量の任務に就くことになる。柳植悦は天保三（一八三二）年生まれ、津藩出身で長崎海軍伝習所一期生であり、藩に戻った後はすでに藩内測量の実務を経験していた人物である。柳と雋吉が乗り込む「第一丁卯」は、イギリス海軍の軍艦シルビア号に同行し、紀州尾鷲などの測量を行った。そこで、大三角地形測量（柳植悦）、岸測量（柳植悦、伊藤雋吉）、天測（伊藤雋吉）、鍾測（柳植悦、伊藤雋吉）などの分担として、イギリス式測量術を実習した。⁽⁴³⁾その後、「第一丁卯」はシルビア号とともに瀬戸内海の塩飽諸島へ移動して共同測量を行った。その成果は、日本の水路測量原図第一号『鹽飽諸島實測原圖』となり、シルビア号艦長セントジョンに「此測量原稿図ノ各部ヲ調査スルコト良久ニテ窃ニ感ル所アル」と述べられるほどに熟達したとある。⁽⁴⁴⁾その後、柳植悦は水路事業の創設を計画し、明治四年（一八七二）年九月には、兵部省海軍部に、秘史局・軍務局・造船局・水路局・

会計局が創設され、水路事業が本格化する。同年、柳と雋吉らが乗り組む「春日」（全長七三メートル・排水量一〇〇〇トン）は、さらにシルビア号に同行して北海道沿海測量に向かい小樽港の測量を行い、帰路で釜石港などを測量している。このとき、柳艦長は大三角と水路記事を担当し、雋吉はおもに天測を担当したとされる。⁽⁴⁵⁾

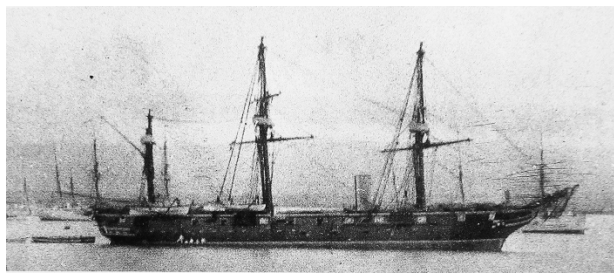


図3 「筑波」『写真 日本海軍全艦艇史』より

測量任務を果たした柳と雋吉は、明治四年にそれぞれ中佐と少佐となり、柳は水路局掛に、雋吉は「春日」艦長に任命される。その後「日進」副長（艦長は真木長義）を経て、明治五年に中佐へ昇進した雋吉は「筑波」艦長となる。ここで、水路局の業務から離れ、教育を主とする任に就いていく。「筑波」【図三】は全長五八メートルの機帆走木造船で排水量は約二〇〇〇トンで

あった。⁽⁴⁶⁾機帆走とはいえ「蒸気力は港の出入若しくは已むを得ない場合に限り使用する定め」であり、帆走船であった。⁽⁴⁷⁾

明治七年に「筑波」は海軍兵学寮の練習艦となり、練習生を乗せて九州へ、その後台湾出兵の際には十一月に台湾に寄港し、厦門経由で二月品川に帰港している。⁽⁴⁸⁾

明治八（一八七五）年四月、練習艦「筑波」は航海練習として六ヶ月の日本周回航海を命じられ一〇月に完了、一〇月二二日に遠洋練習航海の実施艦として、サンフランシスコへの回航を命じられる。日本海軍の遠洋練習航海の初めと言われる航海であり、艦長伊藤祐吉中佐・副長福村周義少佐、後に運用術の権威となる三浦功大尉と新井有貫中尉らが乗り組んでいた。生徒として乗り組んだ中には、山本権兵衛・片岡七郎・日高壮之丞・上村彦之丞ら明治二〇年代以降の海軍を支える人物がいた。⁽⁴⁹⁾この練習航海は無事に太平洋を横断しサンフランシスコに到着、⁽⁵⁰⁾明治九年二月にはハワイの Honolulu に寄港し、カラカウア国王への謁見や国王の艦訪問を受けたりと交流した。⁽⁵¹⁾その後、四月に「筑波」は日本に帰り着いている。ハワイで雋吉は国王からの日本人移民の依頼を受け、四月に雋吉は帰国後に海軍大輔川村純義に報告しているが、ハワイ移民はすぐには実現せず、明治一四年にはカラ

カウア国王自身が来日して移民を請願するなどを経て、明治一八年ごろに実現している。⁽⁵²⁾

明治九年九月、雋吉は「筑波」艦長から兵学校監学課長兼教務課副長となり、一〇年に兵学校次長、一一年四月に「金剛」艦長となり（全長七〇メートル・排水量二二五〇トン）、一月に大佐へ昇進。一四年六月に「金剛」艦長から海軍兵学校長となり、明治一五年に少将となる。「金剛」艦長時代には特に大規模な軍事行動があったわけではなく、「金剛」が壬午事変で朝鮮水域に派遣される際にはすでに兵学校長として陸に上がっていた。また、軍務の傍ら、数学者の神田孝平が主催する東京数学会社の『東京数学会社雑誌』に明治一一（一三年に、柳猶悦（水路局）や赤松則良（横須賀造船所）らとともに関与している。⁽⁵³⁾

そして少将となった雋吉は、新たに創設されることとなった運輸会社の共同運輸会社社長に、現役少将として就くこととなる。共同運輸は、海運力の強化と、三菱の独占状態であった海運業への対抗策として、渋沢栄一らが立案し農商務大輔品川弥二郎が設立事務を担当した、政府色の濃い会社である。⁽⁵⁴⁾明治一五年七月一四日に発起人会が開かれ、その中で「平常非常二於テ兵商二途ニ欠ク可カラサルノ目的ヲ両全」せん

がために「政府ハ戦時供用ニ足ル可キ艦船ヲ製造又ハ購入シ本社ニ交付ス可シ」や「非常戦時ニ際シ其社ノ船舶ハ何時ニテモ海軍卿ノ召募ニ応ス可シ」といった微用に関する事柄に加え、「其社ノ各船ニハ海軍士官ヲ実地修行ノ為メ乗組マシム可シ」という教育に関する条項も盛り込まれた。⁽⁵⁵⁾この共同運輸会社は明治一六（一八八三）年一月一日、北海道運輸会社など三社を合併して発足、社長は伊藤雋吉少将・副社長は遠武秀行大佐、所有船舶は汽船五隻・帆船二二隻であった。⁽⁵⁶⁾共同運輸は発足当初は微々たる景状であったが、後述するイギリスでの船体購入とその到着とともに事業を拡大していき、一七年に入ると三菱会社との並行路線で両者は激しい競争を起こしていく。⁽⁵⁷⁾苛烈競争を重く見た農商務卿西郷従道は、明治一八年一月に両者に妥協の勧告をするがそれでも収まらず、最終的に四月に農商務少輔森岡昌純を共同運輸会社社長に就任させ、雋吉は更迭され海軍に復帰、両社の争いは合併して日本郵船が創設されたことで終結した。海軍に復帰した雋吉は横須賀造船所長として、明治一九年一月の海軍官制改革で艦政局長に就任するまで勤務することとなった。

少し遡るが、共同運輸が発足した明治一六年の一月二七日、

雋吉は新造船建造と購入のためにイギリスへ向かい、一一隻の新造船の契約を交わしている。⁽⁵⁸⁾また、同年七月より翌一七年二月にかけて、海軍の新造艦に関する現地調査・交渉も行っていた。新型艦の計画自体が紆余曲折し、最終的にイギリスへは「浪速」「高千穂」が、フランスへは「畝傍」が発注されることになるが、その連絡・交渉役となり、翌一七年七月に帰国している。海運業に関する経験だけでなく、艦船購入交渉に関与していたことになる。

四 艦政局の局員と伊藤雋吉の人物像

以上、艦政局長になる前の雋吉の経歴を挙げてみた。台場構築で旧式とはいえ造兵に従事し、兵学寮での教育業務、水路局での測量任務などの経験、練習艦の艦長として初めての遠洋練習航海を成功など、実戦よりは軍政や教育方面での活躍が目立っていた人物といえる。また、共同運輸の社長として、海運の実際を目の当たりにしたことや、海外への艦船発注の交渉を行ったことなども、軍政方面の能力を伸ばす契機になったと思われる。これらのことから、造兵・造機や需要品の計画、有事の船舶徴発といった多岐にわたる艦政局の初代局長として、経験実績ともに十分な人物として適材だった

表2 1886 (明治19) 年 艦政局員一覽

役職	氏名	階級	出身	前職	生年	没年	最終階級	備考
局長	伊藤 雋吉	少将	丹後田辺藩	横須賀造船所長	1840	1921	中将	
次長・兵器課長	坪井 航三	大佐	長州	横須賀造船所次長	1843	1886	中将	72-74 渡米・海軍運用を学ぶ 黄海海戦時の第一遊撃隊司令官
兵器課係	前田 亨	少技監	幕臣・愛知	兵器局検査課長	1841	1911	造兵総監	軍務の傍ら、海軍士官を多く排出する攻玉社にも関与
兵器課係	神宮司純粹	大尉	薩摩	水雷局	1844	1884	少佐	94 横須賀水雷隊操練中に倒れそのまま死去
兵器課係	富岡 定基	大尉	信濃松代藩	軍事情第二課	1854	1917	中将	76-79 渡英 82「水雷新論」を著す
兵器課係	澤 鑑之丞	少機関士	幕臣	長浦水雷局	1860	1947	造兵総監	『海軍七十年史談』著者
造船課長	佐々 左仲	大技監	金沢	主船局造船課長	1862	1905	造船総監	77-81 渡英・造船を学ぶ 日清日露戦役艦の計画に関与
造船課係	櫻井 省三	少技監	金沢	主船局造船課	1854	1944	造船総監	77-81 渡英・造船を学ぶ 造船技師ヘルタンの意見書翻訳
機関課長	宮原 二郎	少技監	幕臣・静岡	主船局機関課	1858	1918	機関中将	75 渡英・機関を学ぶ 96 官原式水管缶 (ボイラ) を開発
機関課係	黒部 広生	大技士	福岡	主船局機関課	1857	1913	造船総監	
機装課長	田代 郁彦	少佐	福岡	「其津」副長	1857	1909	大佐	02～09 門司市長
機装課係	小林 譲作	大尉	幕臣		1855	1891	大尉	88 海軍大学校へ 91「厳島」回航任務中に死去
機装課係	小川 直一	大機関士	長崎	調度局艦船営需要品取調掛		1916	機関大佐	
需品課長	判 正利	少佐	静岡	横須賀鎮守府倉庫主事				
需品課係	和田 義政	大尉	薩摩	横須賀鎮守府長官秘書		1907		
需品課係	大木 治吉	大機関士	幕臣	主船局機関課	1859	1922	造船少将	
海運課長	萱野寛兵衛	少佐	土佐		1842	1893	少佐	元海援隊士 70-74 渡米 造船を学ぶ 後に通信省官船局長崎港務部長
海運課係	河村 弘貞	大尉	津山		1850	1911	少佐	
建築課長心得	原田 啓	主計少監	岩手	調度局管轄課長	1846	1921	主計中将	
小野浜造船所長	山縣少太郎	大技監	長州	主船局機関課長		1924	造船大佐	71-78 渡英 造船を学ぶ
製造課	梅野 利邦	少技監	静岡	横須賀会計向整理専務		1888	少技監	88 英国から帰国中に死去
	河崎 民雄	大技士	長州				造船大監	80 渡仏 94 佐世保鎮守府造船部造船課主幹 99 療養
	内藤 政共	大技士	三河孝母藩	主船局御用掛	1859	1902	大技士	81-85 渡英 孝母藩主内藤文成の養子 90 貴族院議員へ

明治 20 年に艦政局配属

造船課係	土師外次郎	少技監	金沢	横須賀造船所造船課		1903	造船総監	71-78 渡英・造船を学ぶ
機関課係	丸田 秀實	大機関士	大坂	小野浜造船所造船課	1859	1922		75-83 渡英 93 退官 三菱造船所で技師長・造船部長・専務
機装課係心得	植坂虎次郎	少尉		「金剛」分隊士				

※ 『機員録 明治十九年十一月・海軍武官准士官以上名簿』『機員録 明治二十年六月(海軍省)』『日本海軍史 将官履歴』上下 『日本陸海軍総合辞典』『明治過去帳:物故人名辞典』『幕末明治海外渡航者総覧』『朝日新聞』『読売新聞』『官報』より作成

と言えるのではないだろうか。

このような経歴を持つ伊藤雋吉と共に、初期の艦政局員に任命された人物は【表二】の通りである。佐雙左仲や宮原二郎といった、初期の海軍で中核をなす技術士官が名を連ねているのがわかる。翌年には英国で造船を学んだ土師外次郎なども艦政局に加わっている。また、同時期に創設された造船会議と兵器会議についても、その構成員を挙げておく【表三】。これらの組織で、技術的な計画が討

表3 1886（明治19）年造船会議・兵器会議議員

造船会議

	氏名	階級	役職
議長	赤松 則良	少将	造船会議議長
	坪井 航三	大佐	艦政局次長
	黒岡 帯刀	大佐	参謀本部第三局長
	伊月 一郎	大佐	兵学校学術主任
	佐藤 鎮雄	大佐	大臣秘書官
	佐雙 佐仲	大技監	艦政局造船課長
副幹事	若山 鉉吉	少技監	造船会議副幹事
	櫻井 省三	少技監	艦政局造船課

兵器会議

	氏名	階級	役職
議長	相浦 紀道	少将	兵器会議議長
幹事	末川 久敬	大佐	特売部理事官
	芝山 矢八	大佐	参謀本部海軍部第二局長
	山本権兵衛	少佐	「浪速」副長
	谷 信久	大尉	兵学校砲術教授
副幹事	富岡 定恭	大尉	艦政局兵器課
	伊集院五郎	大尉	参謀本部海軍部第一局
	島村 速雄	大尉	参謀本部海軍部第一局
	前田 亨	少技監	艦政局兵器課
	大河平才藏	少技監	海軍兵器製造所

※『職員録 明治十九年十一月・海軍武官准士官以上名簿』より作成

議されていくことになるのである。

雋吉自身も、この艦政局で明治一九年一月二九日から明治二三年五月二一日の約四年勤務をし（後任は相浦紀道）、その後は海軍次官となり明治三三年五月から明治三一年一月までの約八年間、大臣である樺山資紀・仁礼景範・西郷従道を補佐し続けた（後任の海軍次官は斎藤実）。また、明治二六年五月二〇日から明治二八年三月八日、日清戦争の少し前から終結直前までの約二年間、軍務局長も兼任している（後任は山本権兵衛）。このように、明治二〇年代の軍政に関しては中枢に近い人物であった。この後、山本権兵衛が海軍大臣になる際に第一線を退き、貴族院議員として勤めていくことになる。雋吉は、前線に出て勇ましく活躍するタイプの軍人ではなく、能吏・官僚型の人物として海軍に貢献した人物であったと言えるのではないだろうか。

最後に、雋吉の人物像についていくつかの史料から述べておきたい。まず挙げておきたいのは「海軍の人物評」という読売新聞・明治二六（一八九三）年の連載記事である。「その七 伊藤次官」の欄において、

君は才子多病の名を得ると共に才子多芸の名ある人なり文章と云い書と云い画と云い何一つ能くせざる者なく

おまけに口までが利口なり而して海軍の事には一通り明らかなるが故に次官には最も適任者なるが如しと雖ども胆力の足らざる為め折角の多芸多能多才も十分の用となること能わず議會に出づれば直ちに議員より槍込められ役所に戻れば薩摩人に左右せられ見るものとして屢々気の毒の思をなさしむ嗚呼君に胆力あらしめんか一廉の有力者なるべきに惜哉此好人物（明治二十六年 六月一日朝刊）⁽⁶²⁾

と述べられている。新聞記事で脚色されている部分もあるうが、雋吉の海軍での立ち位置がうかがえる文章ではないだろうか。

ここで、多病の人と称されているが、「金剛」艦長時代の明治一三年二月四日に気管支加答児症で二週間、兵学校時代の明治一四年一二月に感冒症で一週間、明治一五年六月二九日に喉頭加多児症で一週間、療養のために休職している。共同運輸社長時代の病歴は明らかではないが、海軍に復帰した後は明治一八年七月一〇日から扁桃腺炎で一週間、明治一九年四月五日に胃弱兼脳充血症で一週間、明治二〇年一月二九日から三月二六日までの二ヶ月間は脳充血症で、同年八月に胃加答流で一週間、明治二十一年六月一九日に胃慢性加答児症

で一週間、明治二十三年二月三日からは熱症で三週間、病氣療養で休んでいる。⁽⁶³⁾ 一年の間で一週間以上の療養がこれほど多い（計一九週）とは、多病の異名にも領けるものがある。しかし、【表一】で同時代の将官の没年を見てみると長生きしている部類に入るのも興味深いところである。

また、能書家であり、次官時代に軍艦の艦尾に付ける艦名の仮名文字の型を書いたと伝えられている。この艦艇の文字に関しては、伝記史料にも書かれてあり、戦後に防衛庁や海上保安庁に関係した旧海軍技術者の証言や回想でも雋吉の文字だとする記載があるなど、⁽⁶⁴⁾ 確かだとは思われるが、今回は雋吉の字であるという明確な法令や規定などは見つけることができなかった。これに関しては今後の課題としたい。

更に、茶についても堪能な人物で、『名士の嗜好』で茶について語っているほか、⁽⁶⁵⁾ 貴族院議員の頃には同じく茶が好きな者達と和敬会という巡会を開き、同席者と共に「茶道一六羅漢」なる異名を得ている。⁽⁶⁷⁾ 幼少からの数学的知識に加え、書や茶にも長じた雋吉は、多芸の評通りの人物だったと言えるだろう。

おわりに

以上、艦政局設立の大まかな流れと、初期の艦政局の職掌、そして人員について概観した。組織が大きくなるにつれて複雑化しつつあった海軍省の部局は、明治一九年に軍務局・艦政局・会計局の三つに統合され、艦政局は技術部門に関する事務を掌握していくことになる。その職務は、造船・造兵・造機の計画や予算案の確認から、船具に関する事務、戦時運輸の調査や輸送に関する艦船・人員の調査といった多岐にわたっていた。

多岐にわたる業務を統括するために、造兵・測量から教育、遠洋航海、運輸会社運営、海外での艦船購入交渉など様々な物事をこなしてきた伊藤雋吉が初代の局長として組織を管理し、技術者を円滑に動かして、四年の在任中に艦政局運営の基礎を築いたものと思われる。

今回は、雋吉とその課員による艦政局初期の施策までは追えず、艦政局創設に関する一考察と称するには不十分な部分もあるが、それはこれからの課題としておきたい。一方で、海軍初期の将官の一人、伊藤雋吉の経歴と人物については、一定の掘り下げができたのではと考える。今後は艦政局とそこに所属する人物の動向を中心として、日本海軍の技術史研

究を深めていきたい。

本稿の執筆にあたり、掲載の機会を与えてくださいました花園大学の鈴木康子先生と『花園大学文学部研究紀要』編集委員の皆様には厚くお礼申し上げます。

注

- (1) 日本船用機関史編集委員会『帝国海軍機関史』下巻（原書房 一九七五年）
- (2) 杉岡師男編「艦政本部第一部所掌の兵器」 防衛省防衛研究所蔵
- (3) 拙稿「日本海軍のアナログ計算機に関する一考察―九二式射撃盤改一を中心として―」『花園史学』三四号（花園史学会 二〇一四年）
- (4) 室山義正『近代日本の軍事と財政』（東京大学出版会 一九八四年）
- (5) 篠原宏『海軍創設史』（リポート 一九八六年）
- (6) 神谷大介『幕末期軍事技術の基盤形成』（岩田書院 二〇一三年）
- (7) 金澤裕之『幕府海軍の興亡』（慶應義塾大学出版会

二〇一七年)

- (8) 奈倉文二・横井勝彦『日英兵器産業史』(日本経済評論社 二〇〇五年)

- (9) 奈倉文二『日本軍事関連産業史』(日本経済評論社 二〇一三年)

- (10) 池田憲隆「一八八三年海軍軍拡前後期の艦船整備と横須賀造船所」『人文社会論叢』社会科学篇七(弘前大学人文学部 二〇〇二年)「一八八〇年代後半における再編海軍軍備拡張計画の展開」一八八六―九〇年上下」『人文社会論叢』社会科学篇一四・一六(弘前大学人文学部 二〇〇五・二〇〇六年) など

- (11) 山口歩「宮原式水管ボイラーとその製造技術について」『科学史研究』一七四号(日本科学史学会 一九九〇年) 坂上茂樹「艦本式ボイラについて」『経済学雑誌』一五巻四号(大阪市立大学経済学会 二〇一五年) など

- (12) 防衛研究所戦史室『戦史叢書 大本営海軍部・連合艦隊一』(朝雲新聞社 一九七五年) 一四―二八頁

- (13) 『海軍省 第一二年報』国立公文書館 JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.A07062096800

- (14) 『公文類聚』第十編・明治十九年・第十四卷・兵制三・

陸海軍官制三「小野浜造船所ノ官制ヲ定ム」明治十九年六月二九日 国立公文書館 JACAR: A1511146800

- (15) 池田憲隆「神戸鉄工所の破綻と海軍小野浜造船所の成立―軍艦「大和」建造の行方―」『人文社会論叢』(人文科学編) 三四号(弘前大学人文学部 二〇一五年) 千田武志「官営軍需工場の技術移転に果たした外国人経営企業の役割―神戸鉄工所、小野浜造船所を例として」『政治経済史学』四五八号(政治経済史学会 二〇〇二年) 池田憲隆「一八八三年海軍軍拡前後期の艦船整備と横須賀造船所」『人文社会論叢』(社会科学編) 七号(弘前大学人文学部 二〇〇二年)

- (16) 『公文類聚』第十編・明治十九年・第二卷「海軍省条例ヲ定ム」第二五条明治十九年一月二九日 国立公文書館 JACAR: A15111082500

- (17) 同右 海軍省条例第五条

- (18) 京都府教育会加佐郡部会『加佐郡誌』(京都府教育会加佐郡部会 一九二五年) 二三六頁 また、雋吉の読みに関しては、当時の新聞などでは「しゅんきち」とルビを振っている場合もあり、通称として用いられ

たようである。本稿では、厚生省の奉職履歴書から作成された『日本海軍史 九将官履歴 上』において「としよし」とされていること、一九一二年作成の華族画報において「Baron Toshiyoshi Ito」とあることから、「としよし」を読みとする。

- (19) 斉田喜十郎『郷土遺風と其の人物』一九三四年 舞鶴西図書館蔵

- (20) 『伊能忠敬測量日記』巻二（大空社 一九九八年）一五四頁 文化三年九月一日

- (21) 注(19) 前掲書 四頁 および『由良川改修史』福知山工事事務所 一九八〇年 一八〇頁

- (22) 注(18) 前掲書

- (23) 岡本正志「物理階梯」の編者片山淳吉の生涯」『科学史研究』一五四号（日本科学史学会 一九八五年）

- (24) 『官員全書改（文部省）』明治五年六月 国立公文書館 JACAR: A09054279300

- (25) 片山淳吉編『物理階梯』（文部省 一八七五年）

- (26) 注(23) 前掲書

- (27) 注(18) 前掲書 二二九～二四〇頁

- (28) 百田重明訳・編『統計学大意』統計寮 一八七九年

- (29) 片山淳吉口述・百田重明筆記『小学物理講義』汲古堂 一八八一年

- (30) 注(18) 前掲書 二二九～二四〇頁

- (31) 注(18) 前掲書 二二六頁

- (32) 墨堤隠士『陸海将校の書生時代』（大学館 一九〇四年 一二四頁）この墨堤隠士は他にも『大臣の書生時代』など伝記系の著作が多くあるが間違っても散見される。この伊藤雋吉の欄も「日清の役には第一遊撃隊の指揮で、目醒ましき働きを致した」とあるが、第一遊撃隊の司令官は坪井航三であり、日清戦争時の雋吉は海軍次官である。このように間違えている部分もあり、扱いには注意が必要と思われる。

- (33) 『先賢追慕会講話集…創立一五周年記念』（京都府立舞鶴中学校 一九三七年）二八頁

- (34) 仲田正之『韭山代官江川氏の研究』吉川弘文館 一九九八年

- (35) 川尻信夫『幕末におけるヨーロッパ學術受容の一断面…内田五観と高野長英・佐久間象山』（東海大学出版会 一九八二年）

- (36) 村田峰次郎『大村益次郎先生事蹟』（村田峰次郎 一

九一九年）一七九〇一八二頁　ここでは、台場建造の命に関して雋吉が大村益次郎に相談した時の談話が残されている。大村は、田辺藩で台場を作っても無駄だが、状況から作らないわけにもいかないので、ゆつくり作って状況の変化を待つこと、作るなら唐金の大砲ではなく鉄製を買うこと、など助言した。

- (37) この時期に作成された大砲に関しては、「国松家文書」としてまとめられており、浅川道夫「舞鶴市郷土資料館収蔵「国松家文書」の大砲関係史料」「軍事史学」五三巻三号（軍事史学会　二〇一七年）にて内容の分析が行われている。

- (38) 注（18）前掲書　二二七頁
- (39) 明倫百年史編さん委員会『明倫百年史』（明倫小学校百周年記念事業会　一九七三年）二八七～二九二頁
- (40) 海軍兵学校『海軍兵学校沿革』第一巻（海軍兵学校　一九一九年）二頁　また、操練所出仕以前の経歴として、明治元年頃には京都の伏見兵学校で学んでいたとする記述もある（『陸海将校の書生時代』一二六頁・「中物価新報」五九九号　伊藤雋吉共同運輸社長ノ略歴　明治一五年十月二一日）。

- (41) 注（18）前掲書　二四〇頁
- (42) 注（40）前掲書　八一～八二頁
- (43) 今井健三「日本海図誕生に果たした英国測量船の技術支援―「鹽飽諸島實測原圖」の作製をめぐる―」「外報図研究ニューズレター」No.8　二〇一一年

- (44) 『水路部沿革史附録』（上）一九一六年　三八～四一頁
- (45) 鈴木純子「幕府海軍から海軍水路部へ…赤門書庫旧蔵地図に残る初期海図の航跡」「東京大学史料編纂所紀要」二三（東京大学史料編纂所　二〇一三年）

- (46) 海軍歴史保存会『日本海軍史』第七巻（海軍歴史保存会　一九九五年）二二八頁

- (47) 沢鑑之丞『海軍七十年史談』（文政同志社　一九四三年）二五七～二五九頁　「遠洋航海の今と昔」

- (48) 注（40）前掲書　一二三頁

- (49) 注（40）前掲書　二〇八～二〇九頁

- (50) 中島武『明治の海軍物語』（三友社　一九三八年）四二～四八頁

また、この航海に関しては、大井昌靖氏が二〇一九年度軍事史学会年次大会において詳細を報告されている。「軍艦「筑波」による遠洋練習航海　―明治八年（一

- 八七五年)、なぜ「筑波」は太平洋を渡れたのか」
- (51) 森田栄『布哇日本人発展史』(真栄館 一九六四年) 七三四～七三六頁
- (52) ハワイ日本人移民史刊行委員会『ハワイ日本人移民史』(布哇日系人連合協会 一九六四年) 二五六頁
- (53) 『東京數學會社雜誌』という雑誌に一八七八年から数間、代微積雜問などを出題している。
- (54) 日本郵船編『日本郵船五十年史』 日本郵船(一九三五年) 三〇頁
- (55) 日本郵船株式会社『近代日本海運生成史料』(日本經濟史研究所 一九八八年) 三二三～三三四頁
- (56) 注(54) 前掲書 四二頁
- (57) 注(54) 前掲書 三〇八頁
- (58) この三菱と共同運輸の争いに関しては、加地照義「共同運輸会社の設立…反三菱汽船勢力の結集」『海運經濟研究』八(日本海運經濟学会 一九七四年) 八木慶和「明治一四年政変」と日本銀行…共同運輸会社貸出をめぐって」『社会經濟史学』五三卷五号(社会經濟史学会 一九八七年) 大石直樹「三菱と共同運輸会社の競争過程—日本郵船会社の設立をめぐって」『三菱史料館論集』九(三菱經濟研究所 二〇〇八年) 関口かをり・武田晴人「郵便汽船三菱会社と共同運輸会社の「競争」実態について」『三菱史料館論集』一一(三菱經濟研究所 二〇一〇年) などで詳しい論考がなされている。
- (59) 造船協会『日本近世造船史 明治時代』(原書房 一九七三年)
- (60) この頃の海軍整備計画については、池田憲隆「一八八三年以降の軍備拡張計画に基づく日本海軍の艦船輸入について」上下『人文社会科学論叢』四・五号(弘前大学人文社会科学部 二〇一八年) 大澤博明『近代日本の東アジア政策と軍事』(成文堂 二〇〇一年)
- (61) 海軍省「公文備考別輯 上 新艦製造部 畝傍艦 上 明治一六～二〇」防衛省防衛研究所蔵 JACAR: C11081469400 「公文備考別輯 完 新艦製造部 高千穂艦 明治一六～一九」JACAR: C11081460900 「公文備考別輯 新艦製造部 浪速艦 上 明治一六～一九」JACAR: ref: C11081463500 など
- (62) 読売新聞 明治二六(一九九三)年 六月一一朝刊二

面

- (63) 『原書類纂』 医療部 各年度にて確認 防衛研究所

戦史室蔵 JACAR: ref: C11082060700

専之助 金澤三右衛門 高橋義雄 の一六人であったという。東久世通禧死去後は、加藤正義が加わっている。

- (64) 注 (33) 前掲書 三〇頁

- (65) 永村清 『造艦回想』 (出版共同社 一九五七年) 二二

二頁 永村清 (一八七八〜一九六六) は横須賀や呉工廠で造船部長を務めた人物で、造船中將となる。ここで「軍艦の文字の原形は、伊藤雋吉が揮毫したもので艦政本部に保存されていた。終戦時に書類が焼かれる中で、桜井清彦技術少佐が苦心して保存し、海上保安庁の巡視船に関係していた宮井忠蔵と福井静夫の両氏を経て海上保安庁に渡り」海上保安庁で戦後もこの文字が使われていると述べている。

- (66) 中央新聞社編『名士の嗜好』(文武堂 一九〇〇年)

二五二〜二六八頁

- (67) 高橋義雄『籌のあと』下巻(秋豊園 一九三三年)

七頁 これによると、東久世通禧伯爵 久松勝成伯爵

松浦厚伯爵 石黒忠恵子爵 伊藤雋吉男爵 三井八郎

次郎男爵 三井高保男爵 益田孝男爵 安田善次郎

馬越恭平 瓜生震 青地幾次郎 吉田丹左衛門 竹内